



キャンドルナイト（令和元年7月7日）

特集 - 豪雨災害

7月7日、忘れない



復興3年目に向けて

あの日から2年。
あたり前になりつつある景色にすら思えてきた。
でも、ふと立ち止まると
かつては見られなかった景色が目に映る。

ただ元の姿に戻すだけでなく、
より強く魅力的なまちになるように。
今月の特集では、復興3年目に向けて取り組む人たちの活動を紹介します。



①追悼式では多くの方が献花に訪れた②約1年5ヵ月ぶりに全面復旧した国道56号線

1年目「復興への決意」

平成30年7月7日。西日本を中心に豪雨が襲いました。数日間続いた豪雨により各所で土砂崩れが発生。市内では、関連死を含む13人の尊い命が奪われ、猛暑の中での断水という過酷な状況が約1ヵ月続きました。

その後、全国から駆けつけたボランティアなどの支援を受け、復旧・復興に取り組みました。発災から1年が経過した令和元年7月7日には、吉田公民館で追悼式が執り行われ亡くなられた13人のご冥福をお祈りするとともに、市長から復興への決意が述べられました。

2年目「少しずつ。着実に」

発災から1年が経過した出水期。市内では豪雨による大きな被害こそありませんでしたが、全国では豪雨に襲われた地域も。令和元年9月には台風17号が九州地方を襲い大きな爪痕を残しました。その約1ヵ月後には、関東地域で台風19号が猛威をふるいました。平成30年7月豪雨の際には心温かな支援をいただいた姉妹都市も大きな被害を受け、立て続けに起きた豪雨災害の経験から「災害はいつどこで起こるかわからない」ことを改めて実感しました。

市内の復旧・復興状況は、工事件数の多さに工事がなかなか進まない状況です。令和元年12月には国道56号線が約1年5ヵ月ぶりに全面復旧したもの、いまだ復旧工事が進んでいないかんきつ園地が多くあります。また、仮設住宅での生活を余儀なくされている人もおり継続した支援が必要とされています。

そのような中、各種団体やボランティアの協力も受けながら、被災者の心の支援や産地復興に取り組んでいます。単に元の姿に戻すだけでなく市の将来を見据えた「創造的復興」を目指し、少しずつですが着実に進んでいます。



令和元年7月 宇和島NPOセンター設立

困りごとを解決したい

宇和島NPOセンターは、災害時に被災者支援でつながったNPO団体のメンバーが中心となり活動しています。「どこに相談すればいいかわからない」。災害時の混乱の中で出てきた問題を1つでも無くしたいとの思いから、行政や社会福祉協議会、民間などをつなぐ中間支援組織の必要性に注目が集まり設立しました。設立と同時に窓口となる「Carriage 吉田バンズ」を開設し、要望調査や相談受付などを行っています。

表には見えない難しさ

NPOセンター設立後、要望の聞き込みのため吉田町の各自治会長を訪問しました。地区によっては、支援を求めることを遠慮していたり、時間が経過し、もう支援をお願いできるところはないかと思っている人もいたそうです。土砂撤去などの支援

Carriage 吉田バンズ

【と き】火～金曜日 午前10時～午後3時、土曜日 午前10時～正午
※日・月曜日、祝日は休み。

【ところ】吉田町東小路甲71-1

【問合先】宇和島NPOセンター ☎ FAX 49-3563 ✉ uwajima.npo.c@gmail.com

災害時だけではなく、
いつでも相談できる
「まちの相談役」に



⑤



③



①



⑥



④



②

① 1年5ヵ月が経過するも残る災害土砂②ボランティアも協力して土砂撤去を行う③令和2年4月、近隣からの聞き取りから立間川の中に車が取り残されていることを確認④放置された車。時間の経過とともに草木に覆われ、あたり前になりつつある風景⑤NPO団体と協力してサロンを開催。何気ない会話から支援の糸口を探る⑥法人化に向けて設立総会を開催

のため現場で活動していると「実はまだ土砂が残っている」という声を聞くこともあり、見えないところで困っている人がいることが分かりました。

未だ残る課題

発災から約1年5ヵ月が経過するころ、自治会長への聞き取りの中から、災害土砂が残されたまま手つかずの状態になっているところがあることが確認されました。持ち主によると、被災したのは倉庫のため生活上必要なところではなく放置していたとのこと。その後、ボランティアの力を借り土砂を撤去しました。

今年の4月にも市民からの聞き取りから、災害により流された車が立間川の中に取り残されたままになっていることを確認し撤去しようとした。発災から2年が経過しようとする今でも、災害の爪痕が各所で確認されます。

支援の「もれ」を共有する

中間支援組織の役割は、行政や社会福祉協議会、民間で連携することで支援の「もれ」を共有し、適切な支援につなぐことです。大規模災害が全国で相次ぐ中、外部からの支援

ばかりに頼ることはできません。もれない支援をするためにも、住民だけではなく各関係機関との普段からの連携が求められています。

現在、宇和島NPOセンターは法人化を目指して活動しています。災害からの復興だけではなく、普段からの困りごとを解決に導く「まちの相談役」として、各団体との連携をさらに強化し、これまで以上に充実した被災者支援の展開が期待されています。



毎月第3木曜日には茶話会も行っていきます。気軽にお越しください。



(株)玉津柑橘倶楽部

背負って立つ覚悟

産地復興や産業の活性化を目指して、玉津地区の若手農家が集まり(株)玉津柑橘倶楽部を設立しました。高齢農家が多数を占める中、若手が奮闘し、将来は自分たちが背負って立つことになる産地を守りたいと復興に取り組んでいます。

昨年の夏には、全国から参加したボランティアと協力して園地復旧のため大量に必要な土のう作りに取り組みました。園地復旧だけでは

なく、かんきつをPRするため県内外のフェアに出展するなど販促活動も行っています。

元に戻すだけではなく

被災園地は、元の状態に近い形に戻す原形復旧工事を中心です。玉津地区ではさらに、急傾斜園地を緩やかにしたり、道路や水路を整備したりすることで生産力を強化する再編復旧工事が計画されています。

園地の復旧工事には時間が必要で

す。工事が完成しても、苗木を植えて果実が収穫ができるまでにはさらに4～5年の時間がかかります。(株)玉津柑橘倶楽部は、この未収益期間を少しでも短くしようと、通常よりも大きく成長させた大苗を栽培しています。大苗により、植え付けから収穫までの期間が短くなることを期待されています。

(株)玉津柑橘倶楽部

【ところ】 吉田町法華津 6-82-2

【問合先】 (株)玉津柑橘倶楽部

☎52-7130 FAX 52-7135

✉ t-kankitu-club@me.pikara.ne.jp

時間はかかる。
ピンチをチャンスに。
いまできることを

新たな取り組み

新しい技術の確立にも取り組んでいます。農家の負担の大きい急傾斜地での栽培ではなく、比較的緩やかな平地でもおいしい柑橘が生産できる新技術の確立です。佐賀県で行われている栽培方法を採用しました。平地にブロック塀で囲みを造り苗木を植えます。根域制限と呼ばれるこの方法は、根の分布域を制限することで果実に負荷を与え、高糖度な果樹生産を目指します。代表の原田さんは、「この実証実験で成果が出れば、平地でもおいしいミカンができる



①



③



②

①平地でもおいしいみかんを育てられるよう根域制限の実証実験に取り組む②本復旧が進むスプリンクラー③スプリンクラーの本復旧には多くの土のうが必要

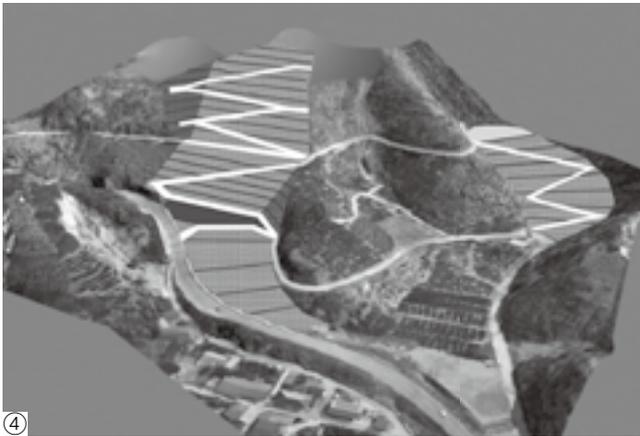
ようになる。災害に遭い、立ち止まりかけたからこそ見直す機会ができる。ピンチをチャンスに変えられよう新しいことにも挑戦していきたい」と話してくれました。

また、研修生も受け入れていきます。現在は、県外からの移住者2人を研修生として受け入れて活動を共にしたり、生産技術のアドバイザーなどを行ったりしています。担い手が1人でも増えることは産地を守っていくためにもうれしい話。災害ボランティアなどをきっかけに農業に興味を持ってもらえる機会となっていてい

今年も暑い夏を乗り越えて

喫緊の課題は、スプリンクラーの本復旧作業です。発災以降は給水管が地表にむき出しのまま配管した仮復旧の状態でした。今後、管を地中に戻していく本復旧の作業が予定されています。急傾斜のため機械が入れず、土の掘り起こしは手作業が中心のため時間がかかります。

発災から2年。園地に目を向けると、まだまだ災害の爪痕は色濃く残っています。復興にはまだまだ時間が必要です。それでも、将来の産地復興を目指して、できることから



④

【現況】
モノレールで収集運搬

【計画】
農道・作業道で収集運搬



④玉津地区では、法花津と白浦の2地区で再編復旧工事が計画されています。崩れた園地を緩傾斜化し、排水機能を備えた農道や園内の作業道を整備することで、災害に強く生産性の高い園地として再生する予定です。

少しずつ取り組みます。

「今年の夏もまた過酷な夏になりそうだ」そう言いながらも垣間見える笑顔からは、復興3年目に向けた強い決意を感じました。